



■研究課題名： 学士課程の授業を通した 汎用コンピテンスの形成とその評価 ーマレーシアにおける iCGPA の取り組みが示す可能性と課題ー
■研究者名、所属：藤田晃之、人間系教育学域
■研究分野：キャリア教育学
■キーワード：マレーシア、汎用コンピテンス、学士課程、授業、評価

【研究の背景・目的】

大学設置基準第 42 条の 2 は、各大学に対して「学生が卒業後自らの資質を向上させ、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を、教育課程の実施及び厚生補導を通じて培う」よう求めている。本学においても、学士課程の授業を通した汎用コンピテンスの形成について、教育企画室及びチューニングタスクフォースを中心に検討が重ねられてきているが、今後は、汎用コンピテンスに関するベンチマークの設定のみならず、学習状況のモニタリング、学習成果の評価が必然的に求められるようになるだろう。本研究では、学士課程における汎用コンピテンスの育成と評価について、大胆とも言える枠組みと方策を提示したマレーシアにおける「iCGPA (Integrated Cumulative Grade Point Average : 統合的累積的 GPA)」の取組の現状と課題を、実地調査 (2017 年 7 月 : JSPS 科研費 16H03791) の結果を基に報告する。

【研究の概要・成果等】

2014 年、マレーシア教育省 (高等教育省) は「高等教育改革 10 年計画」を公表し、10 項目の達成目標を設定し、その第一目標を「起業的な発想力を持ち、全人格的にバランスのとれた卒業生の輩出」とした。当該目標を達成するために導入され、2019 年度までに国内の全大学・全学部での実施が目指されたのが「iCGPA」である。

「iCGPA」は、「社会性・責任感」「価値観・態度・プロフェッショナリズム」

など 8 領域の汎用コンピテンスについて、各大学の授業 (講義・演習等) を通して評価した上で、その結果をレーダーチャートの形式で示し、公的な成績証明書に従来型の成績一覧と

■「iCGPA」の全国共通評価項目

1. 知識
2. 精神運動 (psikomotor) 技能・専門技能
3. 社会性・責任感
4. 価値観・態度・プロフェッショナリズム
5. コミュニケーション能力・リーダーシップ・チームワークスキル
6. 課題対応能力
7. 知識・技能向上のための自己管理能力・生涯学習遂行能力
8. 管理的・起業的 (ciri-ciri keusahawanan) 能力

出典 : Kementerian Pendidikan Malaysia (2014) *Pelan Pembangunan Pendidikan Malaysia [Pendidikan Tinggi] 2015-2025*

ともに掲載しようとするものである。

これを受け、各大学は、それぞれの学部等の特質を踏まえた具体的なベンチマーク（到達目標）を設定するよう求められた。各授業においては、「評価項目 1: 知識」を必須の評価対象としつつ、それ以外の項目については、当該授業の特質に即した評価項目を 1～2 点選び、一人一人の学生の汎用コンピテンスを 0 点～4 点の 5 段階で評価する。各授業の評価を卒業まで累積し、卒業時点での各評価項目の平均点をレーダーチャートとして表したものが当該学生の「iCGPA」である。

なお、マラヤ大学の実践モデル（右図）が示すように、演習や実習の機会がない初年次等においては、「コミュニケーション能力・リーダーシップ・チームワークスキル」「課題対応能力」など、育成・評価の対象とならない項目がある。

【期待される意義や波及効果等】

「iCGPA」の推進施策は、一貫して、中央政府（教育省・高等教育省）が強い主導性を発揮して展開されてきた。それゆえ評価主体となる各大学の教員はもちろん、産業界においても、その理念や仕組みについて十分な理解が確立されていないのが現状である。さらに、2018 年 5 月のマレーシア議会下院選挙において、マハティール元首相が率いる野党連合が勝利したことにより、2019 年度までの全大学における実施という当初の目標についても見直しがなされている。

このようなマレーシア国内での課題はあるにせよ、各学部がその特質に即しつつ在学生が獲得すべき汎用コンピテンスを明示し、各授業内容や指導方法がそのうちどのコンピテンスの育成に寄与するかをシラバスに明記した上で、授業を通してそれらの力がどの程度身についたのかを丁寧に見取ろうとするスキーム自体は、日本における今後の実践に対しても一定の示唆を与えるものと言えよう。また現在、日本では、初等中等教育段階においても、社会的・職業的自立を図るために必要な基盤となる能力を全ての教育活動を通して育成するキャリア教育の実践が求められていることから、学士課程以前の学校教育に対しても「iCGPA」の発想は示唆を与え得ると考えられる。

【主な論文・著書・ホームページ等】

キャリア教育学研究室ウェブサイト：<http://www.human.tsukuba.ac.jp/~tfujita/>

■マラヤ大学工学部の実践モデル

※マラヤ大学工学部では、教育省が提示した8項目のうち、4項目について2分割し、全12項目の目標(Programme Outcomes [PO])を設定してICGPAを算出している。

〈1 年次前期〉

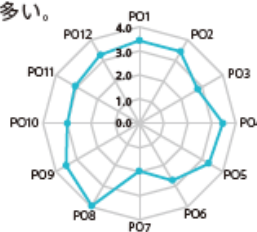


〈2 年次後期〉



1 年次では演習・実習科目を履修しないため、評価の対象とされない項目が多い。

〈3 年次後期〉



出典：マラヤ大学工学部 Ramesh Singh 教授作成資料より抄出